

景観フォーラム

巻頭言

経世済民という言葉があります。広辞苑に依れば「世の中を治め、人民の苦しみを救うこと」とあります。言い換えれば、世の人々が困らないように、より積極的に言えば、皆が幸せになるように世の中を治めること、ということになるかと思えます。

しかし、現代の日本の状況を鑑みるに尋常ではない事件が多発しております。自分の子供を仕置きと称して徹底的に暴力を加えることが頻発しており、なんと1万人以上の子供が保護対象になっているそうです。そして、拳句の果てには10歳の自分の子供を殺してしまうという事件がありました。これをどう考えるか、色々あるかと思えますが、いじめられた人間は、より弱い人間をいじめるようになるそうです。この論法からすれば、子供を虐待する親は、世の中のものより大きい権力から虐待を受けているからだということになります。

日本社会は今から50年前と比べれば、身に着けているもの、街に氾濫している生活必需品等々、そして目に入る街の景観も視覚的にはすべてが小綺麗になっているかのように思えます。豊かになったというのはこういうことなのかと思える次第です。ところが、そこに住む人々の心の中はうかがい知れぬ殺伐とした世界が広がっていることを示しているのがこのような子供虐待事件ではないでしょうか。

そして、今から150年以上前の江戸時代末期に日本を訪れた西洋人の目には、日本についての印象を「子供の楽園」と称しております。「いたるところで、半身または全身はだかの子供の群れが、つまらぬことでわいわい騒いでいるのに出くわす」と記しております。（渡辺京二著『逝きし世の面影』からオールコック著『大君の都』）まさに西洋人が羨むような子供は宝であることを証明していた国が存在していたのでしょうか。児童労働が常態化し産業革命に邁進していたイギリスから来たオールコックの目にはさぞかし驚きとして映ったことでしょう。

「良き景観あるところに良きコミュニティがあり、良きコミュニティは良き景観を創造する」をモットーにしているわれらが団体は、次に何をしなければならぬかは判然としているのではないのでしょうか。心から経世済民を実行できる真の経世家を政治家に選ぶべきではないでしょうか。

NPO法人日本景観フォーラム理事長 齊藤全彦

<日本景観フォーラム2019年度（平成31年度）年間スケジュール>

*2019年度とは2019年4月1日⇒2020年3月31日のことです。

2019年

- 4月25日（木）第1回理事会・総会 於JICA研究所
- 5月21日（火）**第1回景観研究会（横浜市関内の景観）** 於JICA研究所
- 6月15日（土）**第1回景観まちあるき（横浜市関内）**
- 7月 23日（火）**第2回景観研究会（歴史的文化的景観まちづくり）** 於JICA研究所
- 8月 夏休み（景観研究自由参加）or 一泊二日で遠方の町並み見学会など？
- 9月24日（火）**第3回景観研究会**：（秩父市の景観）於JICA研究所
- 10月26日（土）**第2回景観まちあるき**（秩父市）
- 11月19日（火）第2回理事会 於JICA研究所
- 12月17日（火）忘年会（素敵な飲み屋街）

2020年

- 1月25日（土）**第3回景観まちあるき**：神社景観（香取神宮）
- 2月18日（火）**第4回景観研究会**：お台場の景観 於JICA研究所
- 3月28日（土）**第4回景観まちあるき**（お台場）

★以上の年間スケジュールは第一回理事会の承認の上実施されます。

感じる芸術祭・真鶴まちな一れ ～町民の方々への尊敬の念をこめて～

真鶴まちな一れ実行委員会
 実行委員長 ト部美穂子

真鶴町は、神奈川県西部に位置する人口約7,300人、面積約7平方キロメートルという、県内で2番目に小さな港町です。豊かな魚貝が運ばれてくるこの「相模湾」と、魚付き保安林として長く町民の手によって守られてきた「御林（おはやし）」、誇り高き日本三大名石「本小松石」、斜面地で形成された坂の町が生み出す日の恵みをいっぱい浴びた柑橘農業、そしてこの自然の中で積み重ねてきた人々の営みによって、真鶴町の固有の風景とコミュニティが今も深く根付いています。

「真鶴まちな一れ」は「町そのものがアートである」というテーマのもと、2014年に、まちづくり条例の「美の基準」施行20周年を記念して第1回目が開催されました。それは決して壮大なものではなく、「どこか懐かしい背戸道」や「周囲に配慮した家々の並び」、「思わず触れたくなる、石垣の隙間を縫うように咲く小花たち」「階段の途中でおしゃべりをするお母さん達」など、この町に生きる人々の日々の営みそのものがとても美しいという、私達の素朴だけのおそらく多くの人々の根底にも流れる感覚を大切にしたい、そしてこの町の美しさを多くの人と共有したい、という思いから始まった芸術祭です。そんな思いをもった有志たちで走り始めた第1回目から、時には失敗し、時には悩み、多くの方々にご指導いただき、またご迷惑をおかけしながらも、少しずつ応援していただく声も寄せられるようになった中、2019年3月に第4回目の開催という運びとなりました。



「豊かな自然の中で営まれる人々の生活風景の美しさ」を定めたデザインコード「美の基準」の思いをもとに、芸術祭は、①現代アートの点在展示と②アートで遊び真鶴を知るワークショップの2本柱で開催されています。

①現代アートの点在展示

現代アートの展示は、町民等の実行委員会メンバーが案内するガイドツアーにより町内を周遊する中で美の基準が謳う真鶴町の美しい風景を楽しんでいただいています。また、作品の展示場所については、毎回、町内の空家・空き店舗を地元のつながりで開拓し、活用しています。その中から生まれる地元町民の皆様との出会いが、実行委員会メンバーにとっては嬉しい原動力になっています。そして、8～10名ほどの規模で招聘する作家の方々も滞在制作することで真鶴町をテーマとした作品を制作していただいています。

また、第4回目となる今回は、町民参加型のアート作品として「ヤーンボミング」を展示しました。半年の準備期間をかけ、子どもから大人まで様々な町民の方々が編んだ毛糸の編み物をつなぎ合わせ、メイン会場の建物や樹木に飾り彩り豊かな風景を生み出す「町民参加によるパブリックアート」の作品です。現代アートを東京ではなく地元の真鶴で楽しむとともに、町民の方々と一緒にアート作品を創るという活動の一つの思いが叶いました。



②アートで遊び真鶴を知るワークショップ

ワークショップは、美の基準が大切にしている「小さな人だまり」と「店先学校」をテーマに開催しています。一枚の紙で連なる鶴をつくる折り紙ワークショップを始め、ロックバランスングやクラフトづくり、パステルアートとフォークアートといった子どもから大人までアートで遊べる企画と、石磨きや干物づくり体験、農園での野草のお茶づくりといった真鶴の仕事を体験する「店先学校」シリーズが、毎回真鶴に住んでいる町民の方々を中心に企画され期間中に20～30タイトル開催されています。

真鶴の町民の方々と一緒にこの町で生きていきたい。それがこの芸術祭の想いです。まちなーれの開催期間は1日だけの単発イベントではなく、2週間～3週間の期間を設けて開催されます。その中で、「アートで遊ぶ真鶴の暮らし」を町民の方々に楽しんでいただくとともに、町外からお越しの皆様には真鶴町の魅力を知ってもらい、地元の町民と出会い交流する機会となったり、飲食店や旅館といった地元のお店に新しい賑わいが生まれることを願っています。私たち真鶴まちなーれが大好きな真鶴町の町民の皆様への尊敬の念をこめ、これからも地元の皆様楽しんでいただける芸術祭やアートプロジェクトを積み重ねていきたいと思ひます。



『押入れと宇宙』

2019.4 林 岳

まだ誰も見たことのない場所はどこにあるのだろうか。
私は作品を作るときそんなことをよく考えている。

彫刻という労力に対して結実の少ない分野で制作を行っているとなぜ自分は彫刻なんて作っているのだろうか、と思うことが多々ある。そもそも私が彫刻を始めたのは高校生の頃で、その頃は美術になどほとんど興味はなく、座学がしたくないから美術科の高校に進学し、美術科の中では実際に立体物を作ることの出来る彫刻が楽しそう、といった程度の考えで始めてしまった。

しかし今考えてみるとその時に感じていたなんとなく楽しそうという感覚がとても重要なものであったと感じている。もっと小さかった頃を思い出すと、よく洗濯バサミやハンガーを使ってモンスターのような動物のような物体を作っては動かして遊んでいた。似たような記憶がある方も多いのではないだろうか。何事にも集中力のなかった自分がそんな時だけ何時間も夢中になって遊んでいたと母から聞いた。きっとその時の私は脳みその中にうずうずと溜まっていた妄想の世界(自分にとってはとても美しくドキドキする世界)の一部が洗濯バサミやハンガーという体を借りて実際の世界に飛び出してきたことがとても嬉しくて、また自分が妄想の世界に入っているような気もして、その微睡みの時間に気持ちよく酔いしれていたのだと思う。高校進学の時なんとなく楽しそうと感じたのはもしかするとそんな思い出を無意識に思い出していたからなのかもしれない。

しかし時間はしっかりと流れていて、彫刻を始めてからつい最近までそんなことはすっかり忘れていた、また25歳になった自分はその頃見ていた妄想の世界を同じように見ることは出来なくなった。それでも私は「誰も見た事のない物や景色を実際に彫刻として形にしたい」というコンセプトで彫刻を作り続けてきた。いまだにそんなコンセプトで彫刻を作り続けているのは、やはりあの頃のような気持ち良さをまだ求めているからなのではないかと最近では思うようになった。大学に入ってから石という素材に出会い制作を行っているのだが、石を彫っていると不思議な感覚を覚えることがある。石が生まれてくるまでには自分には想像もつかないような年月がある。また自分には想像もつかないような規模の現象が関わっている。その石を山肌から切り取り、幾ばくかのお金を払って、ノミと石頭をもった私が細かく刻んでいる。そんな事を感じながら石に触れていると、単に石から自分の彫り出したいものを彫り出す事よりも、石の持つ記憶や石の内側の世界に興味を持つようになった。まだ誰も見たことのない場所、石の内側にはそんな世界が広がっているような気がした。石の内側の世界を想像すると、真っ暗な世界に自分一人がプカプカと浮かんでいるようなイメージが浮かぶ。本当に真っ暗で上も下も前も後ろも分からなくなり自分が目を開けているのか閉じているのかすら分からなくなる。ただ、皮膚の感覚だけはやけに冴えていて、手を動かしたり、自分の身体に触れてみたりすると痛いくらいに敏感に感じる。そんな世界を想像しながら石を割ったり削ったりしているとある時ふと何か懐かしいような感覚を味わった。まだ妄想の世界と現実の世界を行ったり来たりしていた頃、押入れの中でよく遊んでいた。おやつと飲み物を持って真っ暗な押入れに入るだけで見たこともない遠い世界に旅する事ができた。時には深い森の中に、時には何もなし砂漠の真ん中に、また、海底火山のような景色も見た。それはもしかするとその頃見ていたアニメやゲーム、家族で出かけた旅行など記憶の集合体だったのかもしれない。しかしあの時の自分は心の底から押入れの中を全力で冒険していて、勢い余って押入れの天井に頭をぶつけたり、扉を外して転げ落ちたりしていた。冒険を終えて外の世界の空気を吸った時には達成感まで感じていた。実際には狭いところではしゃぎ過ぎて軽い酸欠になっていただけかもしれない。現在の私は石の内側に真っ暗な世界しか想像できなくなってしまった。しかしその暗闇は押入れの暗闇と妙にリンクしていた。幼い頃には見えていた暗闇の先の美しい世界を石の内側に作りたかった。実際にイメージを形にしていくことは難しくなかった、ある具体的なイメージが自分の中に浮かんでいた。しかしそれを私の拙劣な日本語で言葉にすることは恐ろしいのでやめておこうと思う。できるだけ実際に作品を見ていただいた方に自由に想像して頂きたいと考えている。ただ一つ言えることはきっと誰でも幼い頃にはもっと美しい世界が見えていて、あの頃の我が家の押入れは宇宙に繋がっていた。



「押入れと宇宙」



「押入れと宇宙（内部）」

<LFJブックレビュー 61>

『港の日本史』 吉田秀樹著 講談社 2018年刊

港には船着き場がある界限という意味があり、湊には船の集まるところ、ヒトやモノが多く集まるという意味を持つらしい。英語ではportが港町全体を指し、harborが避難所的な港を意味するという。確かにHaneda Airport とか Hayama yacht harborはそれに該当するといえよう。とすると日本語の港はportで湊はharborに当てはめればその違いが明確になってくる。

さて、この書が取り扱っているのは「港」の日本史であり、島国の日本という国家にとって港は外国との出会いの場所であったと言えよう。山ばかりの日本という地域特性を鑑みると、それぞれの集落は山々に閉ざされた閉鎖社会そのものであり、海に面した集落は海が出口でありまた入り口でもあった。山々を乗り越えて他の集落とつながるよりも、船を使って交易することが時間的にも物理的にも現代人が考えるよりもはるかに容易であったろう。即ち、日本の地域特性から考えれば、港町が発展するのは必然であり、北から函館、仙台、東京、名古屋、大阪、神戸、博多などすべて港湾都市である。

第1章では、「港でわかる日本の7000年史」とし、港は縄文時代から既に海運が活躍の場として発展していたのであり、「津」（つ）は水の上を進むことで、「浦」（うら）は入り江や河口部で海が陸地に入り込んだ場所を指し、「泊り」（とまり）は水辺にぴったり近づく場所を意味した。人の出入りとして考えるのは第2章「政治権力とともに栄えた港」を考察しなければその歴史は理解できまい。そして著者は港の発展いかに外部への発展であったかを解き明かすかのように第3章「世界に名を残す日本の港はどこか」として、古来からの港、博多津・堺津・坊津・安濃津・長崎・下田と解き進む。水運の発展の充実としての江戸時代の物流は現代とは隔世の感はあるが、近代の産声を感じさせるとして、第4章「江戸の物流ネットワーク」がいかに明治とつながっていたかを示す。そして第5書「明治150年と近代の港湾」として開港5港がどのようにして行われたか、そこにお雇い外国人がどのように活躍したか、すなわち西洋技術なくして港の近代化はなされ得ぬことであつたし、生糸・綿糸を用いた殖産興業はまさに東京港・横浜港・神戸港などの近代化された港なくしては不可能であつたという。そして、この近代化の到達点が不幸の歴史として日清戦争（1894年）・日露戦争（1904年）は軍港をなくしてあり得ない歴史であつたし、その後の第1次世界大戦への参加はこの軍港で作られた戦艦が参戦を必要とし、第2次世界大戦は欧米列強に追い付けとの掛け声にて戦艦の膨大な製造と活用にて軍港はなくてはならぬものとなつた。

そして、これらの軍港はどのように活用されているか。横須賀軍港は製鉄所から出発して海上自衛隊の重要基地となり、呉軍港は東洋最大のドックを有した海軍の拠点であつたものが海上保安大学がある商業都市となり、佐世保軍港は米軍使用の港として優先使用され、舞鶴軍港は日本海の防衛拠点となっている。（斉藤全彦）



天地玄黄 NO.19 「埼玉県の景観重要建造物①」

今回の天地玄黄では、次回号と2回に分けて埼玉県の景観重要建造物を紹介します。景観重要建造物は、地域の個性ある景観づくりの核として景観上重要な建造物を維持、保全、継承するために指定するものです。景観重要建造物の探訪を機に埼玉県の魅力にも触れていただければと思います。

埼玉県では今までに次の7件を指定しています。

- 第1号 ふじみ野市立福岡河岸記念館（ふじみ野市）
- 第2号 藤橋藤三郎商店のレンガ造煙突（深谷市）
- 第3号 旧平沼寛一郎邸（飯能市）
- 第4号 鴻巣市産業観光館の蔵（鴻巣市）
- 第5号 吾野宿・石田家（藤田屋）（飯能市）
- 第6号 吾野宿・大河原家（問屋）（飯能市）
- 第7号 吾野宿・高山家（うろこ屋）（飯能市）

※飯能市が景観行政団体になったため、第3号、第5号、第6号、第7号は現在飯能市の指定となっています。

■ ふじみ野市立福岡河岸記念館（主屋、離れ、文庫蔵、塀、石垣）（ふじみ野市）

指定番号：埼玉県指定第1号

指定年月日：平成23年3月14日

建造物の所在地：埼玉県ふじみ野市福岡3-4-2

福岡河岸は、江戸時代後半から明治時代にかけて江戸との舟運で栄えた新河岸川の河岸場です。主屋は明治初期の建築で、帳場・金庫部屋などを備えた間口6間の店構えで明治期商家の特色を保持しています。離れと文庫蔵は明治30年代の建築で、新河岸川の舟運の歴史と問屋の暮らし、川風を感じられる気候・風土を生かした建築となります。福岡河岸記念館は、その舟問屋である福田屋をふじみの市が記念館として改修したもので、明治時代に建築された主屋、離れ、文庫蔵は地域のランドマークとなっています。



右から主屋、離れ、文庫蔵



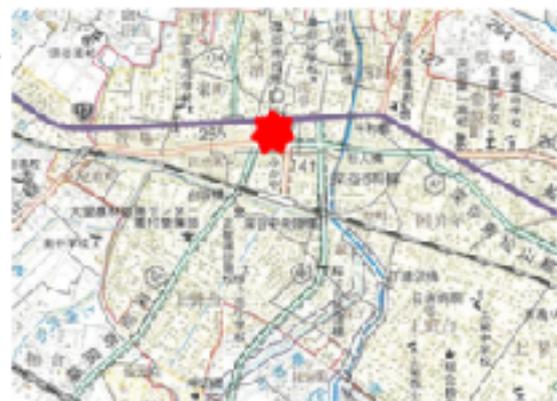
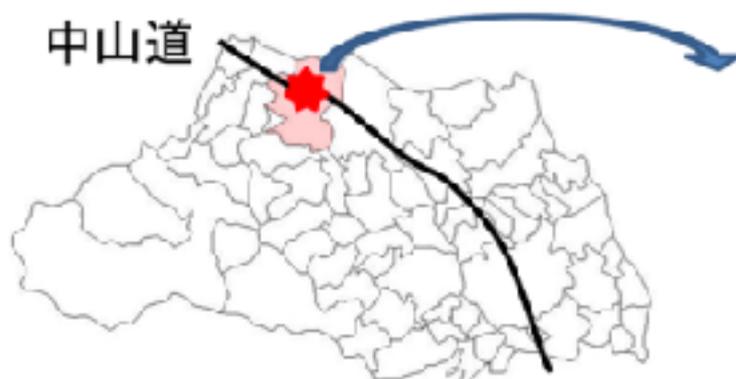
■ 藤橋藤三郎商店のレンガ造煙突（深谷市）

指定番号：埼玉県指定第2号

指定年月日：平成25年3月15日

建造物の所在地：埼玉県深谷市仲町4-10

藤橋藤三郎商店は江戸時代末期に創業した造り酒屋であり、そのレンガ造煙突は大正時代に建造されました。本煙突は景観的価値を保存するために補修工事が行われており、旧宿場町の雰囲気と調和して深谷市を特徴づける景観となっています。また周囲からもよく眺望され、地域のランドマークとして親しまれています。



■ 旧平沼寛一郎邸（主屋）（飯能市）

指定番号：埼玉県指定第3号

指定年月日：平成25年10月8日

建造物の所在地：埼玉県飯能市上名栗201

旧平沼寛一郎邸は明治20～30年代に建築された山あいの古民家です。手入れの行き届いた落ち着いた色調の外観が、周囲の山林や清流などの自然と調和して良好な景観を生み出すとともに、自然と人々の生活が調和した山里の景観の核となっています。建物の一部を見学者の休憩スペースに改装するなど、所有者が景観資源としての有効活用と良好な維持管理に努めています。



〒150-0031 東京都渋谷区桜丘町14-5-502

TEL : 03(3780)3814

FAX : 03(6379)6681

E-mail : info@keikan-forum.com

URL : <https://www.keikan-forum.org>



Landscape Forum of Japan